

軍艦岩

堀口現代人

体にまとわりつく湿気が体力を奪う。台湾の夜は暑さのせいで闇の持つ神秘性が失われている。一歩進むごとに服と体の間を汗が流れる。べったりと汗で濡れたシャツは肌を離れ、一定のリズムでひやりとした不快感を与えに肌に戻ってくる。不思議と風はない。液体と気体の中間であるかのように湿った空気に流れはなく、歩いた分の湿気を回収することになる。時刻は一時半を回ったところだろうか。歩き始めたのが深夜十二時であった。

歩いている理由はない。今夜泊まる宿が無いから一箇所にじっとしていないだけだ。宿を取ろうかと思ったが、宿の店先で意思疎通が取れず宿の人の眉間に皺がよるのを想像して諦めた。歩く前に半時間ほど公園に座ったが、くるぶしに蚊の吸ったこぶを三つばかりこしらえた。足を搔いた爪の先に血が入り込んだのを見て、今夜は一晩中歩こうと決めた。歩くことは決まったが歩くこと以外には何も決まっていない。右に進むのか直進するのかは、その曲がり角で生まれる直感に任せる。信号が変わればその道を自然と通る。その方向に何かがある予感がすれば何も考えずにそちらへ向かう。この自然と足が動く方向に向かうのを大事にしている。自分は直感散歩のプロフェッショナルだ。直感と偶然とは違う。自然に選択しているようでその実、必然である。東京の街でもこの方法で散歩をする。同じ時間帯に同じ場所から出発すると往々にして同じ場所を通ることになる。直感とはそういうものだ。自由に選択しているようで、毎回同じものを選んでしまう。遺伝子に刻まれた傾向性と過去の行動選択の蓄積が、ルート選択として出力されるだけだ。

大きい交差点の左手に、暗い街で唯一つ光るものがある。白い光の中に揺らぎながらカラフルな照明が蠢いている。近づくほど白い照明の不健康さが街に不似合いに目立っていることに気づく。店の前に立つと明るさに目が追いつかずクラクラする。どうやら店に入り口のようなものはなく、道沿いの壁が取り外された開放的な構造のようだ。中からは電子音の音楽が聞こえてくる。白い店内に人の姿は見えない。楽しい空間を演出しようとする思いが暗い街に漏れ出している。楽しませる対象のいない現実が街の方から店内に流れ込む。システムだけが空回りして実質が伴わない様子は見ていて趣がある。この店が少し好きだ。宇宙人の円盤に吸い込まれるようで素敵だなど思いながら店に踏

み入れる。目が明るさになれてくる。何のキャラクタかわからない景品のクレイゲームが通路の両脇に並んでいた。存在しない客を喜ばせる音楽が空虚に響く。出口の向この静けさが音響装置となり虚しさに加勢する。ダンボールで作った装飾、ガラガラの遊園地、弁護士のふりをする詐欺師、中身は空っぽなのに外側だけは装飾して輝かしい。店の通路は一本道で店外から見えたそれが全てであった。突き当たりで振り返ると元通りの黒い街がある。店を出る。店の明かりが唯一の光源である街に戻った。左から来たから、今度は右に進む。クレイゲームからできるだけ離れるように道を真っ直ぐ進んだ。

旅先がどこであろうと私は前もって宿を決めない。旅では行き先を定めず、気ままに電車に乗り、バスに乗り、船に乗り、疲れたところで宿を探す。決めた予定通りに旅をするのはつまらない。数時間後の自分がどこにいるかが不確定のまま漂うのが心地いい。確定しない未来を少しでも伸ばしたいのは、立てた予定をなぞることに面白みを感じないからか、ただの先延ばし癖のためか。先延ばし癖が多大な貢献をしていることは認めが、このスタイルが自分の性質にあってしていると信じている。予定を立ててそれ通りに進むことに喜びを感じ取れなくなったのはいつからだろう。そもそも予定通りに遂行する能力がないのが発端だった。頭の中の自分は超人的な忍耐力と行動力で世界をまたにかける華々しい活躍をした。現実はいつも凡庸な今の自分の延長線上にあった。期待と裏切りの無限反復を経て、凡庸な人間が月並みな活躍をする予定を立てるようになった。現実的な予定を粛々とこなした。計画を遂行できることに對しても不満が残っていることに気づいた。稀に予定通りに進まないときは往々にして下方修正を余儀無くされるときだ。その下方修正も含めて予想ができるようになった時、現実が予想の上限と下限に挟まれる帯の中に存在するようになった。過去の経験の蓄積データが予測の精度を高め、現実には上下に幅のある予測と同一になった。予定を立てるのが楽しく無くなったのはその頃からだったかもしれない。予想通りに進むのがとにかく嫌いになった。思えば自分の進路も風に任せるようになった。予定調和が嫌なのは自然なことであると思う。これから見ると映画のあらすじを予め聞かされると嫌になるし、結果が決まっているオーディションには誰も参加したくないだろう。こんな当然の帰結が世間では共有されていない。観察しうる限りみんな予想通りの日常を粛々と送っている。うまくいっているように見える世界と、その中の異邦人である自分の間に理屈で説明できる差異が必要になる。なぜこれほど予定調和を嫌うのかを自己分析した結果、自分には自由意志がないという結論に辿り着つた。

前方の標識に「山」の文字が見える。矢印が指す方向に行ってみることにした。夜の山を登る危険性が一瞬間をよぎる。最悪の場合、山で獣に襲われ、道を踏み外して夜の

山に取り残され、救助が来ないまま死ぬことになる、らしい。夜山は危ないと言うのは常識として知っている。しかし、自分で経験した限りにおいてこれは成立しない。ライトをつけて暗闇を照らしながら進むのはワクワクするし、頂上からはライトアップされた景色が見渡せるご褒美付きだ。熊が出る、猪が出るという看板はこけおどしにすぎない。現れたことがない。私のいないどこかで活動する熊は、もはや現実の危険ではない。漫画や映画と変わらない、一つの物語である。

山の入り口には日中工事をしていたとみえる建設機材が時を止めて置いてあった。機材を片付ける時は整頓しないものだろうか。オレンジ色のシャベルカーは穴を掘っている最中を写真で撮ったかのように、作業の途中で止まっている。道路に沿うように柵が張られている。電灯の赤みがかかった微かな光は機材と柵が確固たる理由で存在していないことを説明しているようだ。存在してもしなくても構わない、非存在に片足をつこんでいる柵と機材。そう思うとシャベルカーも小さく見え、柵は細く頼りないものに見えてくる。闇が少し広がればこれらの物は無くなってしまうだろう。柵の脇に入り口の小道が見えた。中を覗くと小道は森の中に繋がっているようだ。木々に街灯の光が遮られ、光一つない闇が広がっている。黒よりも黒く、もやっとする気配を感じ取る。ライトをつける前にこの闇に浸かろうと足を踏み出す。道は舗装されているようで、これならしばらくは歩いて行けそうだ。背後の光が遠くなるのを感じる。閉じ込められるでもない、開かれてもいない、空間の中で闇と自分の境界が失われていく。

そのとき、視界が中心にくっと集まった。依然何も見えない。見えない中で世界が広がった布を持ち上げるかのように前方に引き付けられるのがわかる。平衡感覚を失ったように足がふらつく。歩くのをやめた。開いた瞳孔が必死に外界の情報を取得しようとしているのがわかる。視点が後ろに引つ張られている気がする。何も見えていないはずなのに、視界全体が右にゆっくり回ると同時に、左に回っている。自分から離れていきそうな何かが目奥の方で震えている。見えるはずのない自分の後頭部が見えそうだ。自分がそこにいる確固たる自信が持てない。手探りでズボンのポケットを探り、携帯を取り出す。携帯は普段通りついた。携帯のライトを付けて前方を照らした。シダの葉の影絵が楕円の空間に投影される。私の手が動くとき影絵も動き空間が立体的になる。空間の真ん中に舗装されたコンクリートが浮かび上がる。照らされているそれは昼間の道と大差ない。眩暈のような感覚はすっかり消えていた。光に照らされる場所に自分がいることが強く意識された。この道を登れるところまで登ってみようと決めた。

しばらく歩くと闇に目が慣れてきた。ライトが照らす空間の外がぼんやりと見えてくる。ガサガサという音が背後から聞こえる。何かが自分の視界の端で動いている気がする。

る。台湾の猛獣が私を獲物にしようと様子を窺っているのか、光源のライトが揺れているせいで動いて見えるだけか。気配を感じるたびに反射的にびくびく動きつつも、経験的にこれが後者であることを知っている。山を歩くたびに茂みから気配を感じる。その茂みから何か飛び出して私を襲うことは一度もなかった。どうせ気にするだけ無駄なのだ。私の祖先が生存確率を上げるために茂みを警戒してきたという遺伝的記憶が表出しているにすぎない。私には私の蓄積した経験があり、それを尊重する。第一もし獣が私を襲ったからといって、それがどうだというのだ。それが何を意味するのかわからない。言語的には理解できても具体的にイメージすることができない。思考が及ばない。そんなことを理由にこの登山が中断できようか。私が今こうして山を登っているのは偶然ではない。過去の集積の結果としての必然。それを私の理性を使って覆すことはあつてはならない。覆すことなんかできない。外界に対して私ができることは実は何一つない。

人間の脳波は人間の意識が行動を決定する数ミリ秒前に立ち上がる、そんな本を読んだことを思い出す。人が決定する前に脳波で決まっているのであれば、自由意志はないではないかと思った。その結論は私が経験的に知っていることに合致した。私のルート決定の方法を、生き方を、科学が後押ししてくれた気がした。全ては脳の神経が勝手に生み出したこと、そこに私の意志が介在する余地はない。それならば流れに身を任せる以外に方法はない。この選択自体が過去の集積の結果であり、選択ではない。現在を起点に真っ直ぐ一本の道を作るルールを歩いてきた。現在を中心にルールは分岐しない。選択肢を選ぶことはできない。選択肢があると錯覚するだけだ。過去の結果として今があるが、未来は今と連続しては存在しない。必然的に、しかし目に見えず存在することすら確証がない、非連続な遠隔の質的に異なるものとして概念上存在する。自分などという実態はなく、思考を含めて全て現象であり、そのすべての主観的体験を観測することしかできない観測者である。直感に従うのは私の選択ではなく、選択したと錯覚する神経の生み出した擬似感覚だ。私は予定を立てない。計画を立てない。予め決まっている映画ではなく、干渉することができない劇を、偶発的な創発を含めて見ているだけだ。何もしないではなく、何もできない。そんなことを考えているうちに就活のタイミングを逃し、進路がないまま大学を留年した。留年するとすべき課題は降ってこない。気まぐれに台湾の旅券を取り、こうして夜の台湾を徘徊するに至っている。ライトに黒く照らされる名前もわからない葉っぱを踏みながら過去と現在が繋がっていることを意識する。

一人で街を徘徊するのがいつからか唯一の趣味になった。気まぐれで出発し気まぐれに道を決めて歩く。歩きながら自分の中で疑問が浮かびそれに自分が勝手に答える形で

対話が生まれる。その対話を観測しながら半自動的に街を歩く。都会で生活する人々の横を通過することが癖になっていた。見渡す限りを埋め尽くす人間が、目的を持って生活を営んでいるように見えた。私はそこに干渉しない観測者として存在できた。街の装飾と公共交通システムを上滑りしていく。大抵の場合、肉体的に限界が来るまで8時間くらいは歩く。麦茶をペットボトルに詰めこんで家を出る。途中で空腹を感じることもある。お腹が空いていても、人気のある店には入ることはない。導線が店内に引かれることはない。私は街の中を縫うように張り巡らされた私のルートを滑っていくだけだ。虚無感とも無力感とも違う無関係の論理がそこには働いている気がする。あらかじめ決まっている。私がおかを主体的にすることはできない。ふと思っただけ、ふと思っただけがあらかじめ決まっているのだから、これこれをするという表現自体が誤っているかもしれない。ふと偶然に、しかしそれはある意味必然に、「何々になる」というべきか。

三年前、中学からの知己にこのことを話した。彼は私が何をいつているかわからないようだった。自分は今この右手を挙げようと思えば上げられるし、君の論にこうして反駁することができていると言った。私は、それは君がそういうことをするように神経が構成されていて君が選んでいるわけではないと説明した。たまたま私と話すという事象に遭遇し、反応しているだけだ。彼は感覚として理解ができないようだった。彼とこの話をした時は私も感覚的にわかっていた。今なら感覚的に理解できる。理解しているのは私か、理解していると反応しているだけかもしれない。今この思考自体が、台湾の夜の山、それが私に与える感覚に刺激されて私が見せているだけなのだ。私がこう考えるのは、いや考えていないかもしれない。今ドスって音がしたぞ。まあいいか、どうせ気のせいだ。今私が音に反応したのは分かりやすく反応である。自分の反応に自己言及しているこの私は、過去の自分を分析的に見る傾向が表出しているにすぎない。

外界を意識していなかったことに気が付く。息がずいぶん上がっている。せいぜいという自分の息が聞こえ、心臓の周りが引っ張られるように痛い。そういえば今台湾の山を歩いていることを忘れていたぞ。道のどこを歩いて行くかを誰が決めた？ コンクリート舗装だったはずの道はいつの間にか土に変わっていた。木の根が地面と並行に道を遮るように走っている。ライトがそれを照らし、根の立体感がよくわかる。ただ道を歩くといっても右端を歩くのか、真ん中か、木の根をどう躰かずに避けるかを考えなければならぬはずだ。今の私は意識のないところでそれらの判断を下し、無意識に道を進んできた。我ながら歩行している時の自動運転の優秀さに感心する。しかし、思考もこれと同じではないか。思考パターンによって規定されたルートに従ってお決まりの考え

方を繰り返している。山道を登ることができで、どうしてくだらない事を考える事ができないだろう。

それにしてもこの山道はあとのくらい続くのだろう。標高も山頂までの道のりも当然わからない。ふと、この道が台湾の一番高い山の山頂に繋がっている想像をする。いやあり得ない。柵の隣にひっそりと入り口があるような山道だ。どうぞ小さい山に決まっている。ただ小さいにしてはまだ終わる気配がない。気配がないなど考えてもどうしようもないのに。体をくると来た道へと向けて山を下ることはしないのに。なぜこんなことを考えるのだろう。そういえば、外界に対して主体的にあれこれ考えるのをやめることにしたのに、頭の中であれこれ考えることは何故やめないのだろうか。どちらでも干渉できない決まったことをしていることには変わりない。やめない？ やめられないのか？ やめようと今思えば少しづつやめようと思う経験が積みまれていき、やがて考えるたびに考えることをやめようと思うようになるのではないか。いや、やめようと今思うのは誰だ？ なぜだ？ 今これを考えているのはなぜだ？ なぜすぐに疑問を展開するのだろうか。それはこれまでの人生経験であらゆることにすぐ疑問を投げかけてきたから。ではそれが止まるように思考を呼びかける、いわばメタ的に思考をとらえ自由意志がないという理論の下に全てを止めようとするものは全体何だ。真の意味で進む方向へ身を任せ、意志のない物質へ還元されんとする何かはなんだ。山に登っている最中に考えていることに自由意志を認めず、唯物的に私の主体性を否定するのはなんだ。唯物的に私の主体性を否定するものに対してこれはなんだと疑問を持つものはなんだ。どこまで自己言及すればこの思考は止まるのだ。思考が枠組みの中から抜け出せないなら、なぜそれを自覚的に思考することができるのだ。枠組みから出られないまま無限に思考が膨らむのは、設計ミスではないか。

ああ、気持ちが悪い。

ライトを消す。思考で膨れ上がった楕円の空間が消失した。音も聞こえない。気配も感じない。背中のカバンをゆつくりと体の前に持つてくる。ファスナーを開ける。昨日コンビニで買った薄い青色の甘い飲み物が残っているはずだ。カバンの左側に入っていることを背中に背負っていた重心の感覚からわかっていて。手を入れるが見当たらない。ああ、そうかカバンが逆向きだから右側か。キャップを開けて飲み込む。ぬるい。甘い。嫌な甘さが喉を通る。気持ち悪さがぬるくて甘い物への不快感に置き換えられた。残りが少ないペットボトルを飲みきる。目には何も映らない。いや、目を瞑っていた。カエルみたい。カエルが物を飲み込む時、目を瞑るイメージをする。目を開けた。小さい光の粒が上の方に見える気がした。星だ。木の合間から星が見えている。星が見えない

ところが木であるとすれば、先ほどよりも木が減っている。頂上が近い気がする。

ライトをつけて道を照らす。進む道が必然的に浮かび上がる。そういえば山に入ってから湿度が暑さがない。ひんやりと涼しい風が肌をゆつくり撫でていく。闇とひやりとした温度が当たり前のように結びついたためか、ここまで気がつかなかった。照らさなかった道は昼間の道と大差ない。ただこの道を登るだけだ。急にこの道を登るのがつまらないと感じる。照らした先の道が全て見えている。転ぶこともなければ道を踏み外して谷底へ頭から落ちていくこともない。獣も登場する気配はない。夜の山に紛れて失われていた予定調和が、道を照らすライトと同時に顔を出す。早く頂上へ着きたい。

また意識がなかった。今度は何も考えず、ただ歩いてきたようだ。頭上の木々が減り、星空が天井に占める割合がさらに増えている。肌を横切る風は先ほどより冷たく、地上で肌にまとわりついた汗を跡形もなく消していた。道が続く先には周囲とは調和していない人工的な物が浮かび上がる。あの看板のような影は頂上の印かもしれない。きつとそうだ。看板の先には、ラストスパートを宣言するかのよう階段があった。これを登れば頂上だ。登る以外に選択肢はないので、最初の数段の階段を登る。緩やかで疲れが溜まらなさそうだ。先を照らすと、後どれくらいこれが続くのかがわかる。ライトが届かない先までは続いている。段の高さは不揃いのように、転ばないよう注意する。

階段の終わりが見えた。先は見晴らしが良さそうだ。早くあそこへ行きたい。この階段はつまらない。こういう時は意識がはつきりとする。さつきみたいに自動運転で歩いてくればいいのに頭の中で思考が止まらない。ああ階段が辛い。肺が苦しい。心臓の周りが痛い。都合のいい時に意識と無意識に交代させる術はないものか。でもそんなことができたなら私は死ぬまで無意識の状態になってしまうだろう。あと20段くらいか。だいぶ登って来たのだから、さぞかし綺麗な夜景が見えるだろう。いや見えなければならぬ。雄大な星空と夜景が提供されなければ嘘だ。あれ、灰色の雲があるぞ。まさか雨が降るんじゃないか。それだけは勘弁だ。最後の段を登り終わり、視界が晴れる。ライトはゴツゴツした岩肌を照らした。もつと草で覆われた原っぱを想像していた。草を茵り蹴ったりだ。ああ、でも夜景は綺麗だ。綺麗だということにしよう。とりあえず頂上に広がるこの空間がどれほど広いかを知らうと岩に踏み出す。いつの間にか乾いた肌に汗が戻り、冷たい風と熱い肌を仲介している。

パツと空間が消えた。何が起きた？ どうやら携帯のライトが消えたようだ。付け直そうとするがつかない。ライトの部分に触ると熱い。熱を持ったら自動的にライトが消えたのだろうか。仕方がない。視界は空間を失認している。足の底の感覚と小さな星の

微かな光から岩肌を感じ取ることしかできない。背中には熱くも冷たくもない汗が油のように浮き出ている。止まっているのは気分が良くない。地面を手で触ると砂が岩肌を覆っているとわかる。左足を前に出す。靴底を通して硬い岩肌が伝わってくる。左に傾いたまま着地した。地面がしっかりと感じられた。右足を出す。今度は少し高いところで着地した。思ったよりも立体的にゴツゴツしているようだ。目は見えないが、頭の中に岩肌が完成していく。遠くに広がる夜景を見る。気がついたらよりいい景色が見えるように、無意識に歩を進めていた。我ながら自動運転が優秀であることに感心する。慣れるには数歩しかかからない。地面がコンクリートだろうと山肌だろうと岩だろうと、それを当然のものとして歩くことができる。歩けば歩くほど確かなものになってくる。頭の中に岩肌とそれを囲む夜景、天井を覆う星空が広がっていく。

よく見ると夜景も凡庸だ。ただ電灯が遠くて付いているだけだ。一目見た時の賑やかさは驚くが、すぐに空虚であることに気づく。夜空も曇っていて綺麗ではない。あつちの海の方は汚いといっているくらい雲がある。そもそも何かを見るために登り始めた山ではない。もともと期待していないのだから不満を言っても仕方がない。結局山の頂上もどうということではなかった。ただじっと止まっていられない代わりに山を登っただけだ。登る途中でこうなるであろうと直感していたが、その通りになった。ああ、つまらない。

刹那パッと世界が明るくなった。地面が明るく照らされ、対照的に目の前の暗闇が強調された。自分の前には崖があった。足は自然に止まった。崖の先は何も見えなかった。吸い込まれるような闇。今はもう何も見えない。一瞬目に焼きついた岩肌とその終わり。追いつくように轟音が響く。今までの無音を強調するかのように力強く、腹の底に落ちてきた。全身に力が入り、腰が後ろに引けるのがわかる。雷だ。雷が落ちたんだ。

雷が鳴らず、あのまま進んでいたら……と考える。一瞬で目に焼ついた岩肌の景色が目から離れない。目に何が見えているかがわからない。崖の先の闇が大きくなっていく。足はまだ動かない。途端に自分という存在が意識される。今ここにいる自分が、崖を目の前に立ちすくむ自分が、ありありと感じられる。崖から平衡感覚を失って落下していく自分が闇に浮かぶ。どうやら足にはいっばいに力が入っているようだ。固まったように動かない体を確かめたかった。両手で足を触る。ライトがついた。足元を照らす。自分が自分の足で立っていることを確かめたい。できる限りの強い光で自分の足元を照らしたい。慎重に左足を後ろに伸ばし体を来た方へ向ける。震える足で来た道を確認に歩く。下へ続く道が無心で、ただ歩く。

自分が山を下っているのは偶然である。雷が鳴らなければ私はここにいない。いやそ

れも必然かもしれない。そんなことを考えていることが馬鹿馬鹿しくなった。それより自分が今ここにすることが大事な気がする。足元を照らして歩く。道の先は照らさない。懸命に根を避け、でこぼこを乗り越え、山道を下る両足がライトで照らされている。目はその両足をよく見ている。思考は空間を漂わず、全神経が足元に集まる。それが楽しい。山を下山していた時の記憶はない。ただ夢中で下っていたことは覚えている。いつもの散歩のように何を考えたかや、どんなことを思ったかは覚えていない。もしかしたら何も考えなかったのかもしれない。

山道を出ると足は自然と駅の方へと向かった。駅に着くと構内では安心からか眠気がやってきた。床にバッグを置き、それを枕に体を休める。

聞きなれない中国語で目が覚めた。日本に帰ろうと決めた。

堀口現代人

ほりぐち げんだいじん

2019年 東京大学 入学

2022年 東京大学 工学部 在籍